広告　企画・制作／読売新聞社広告局

公益財団法人SGH財団　第18回市民公開講座

がんゲノム医療について

―精密医療の到来？―

公益財団法人SGH財団主催の第18回市民公開講座「がんゲノム医療について―精密医療の到来？―」が2月24日、グランフロント大阪・ナレッジキャピタルで開かれました。専門医や患者団体代表が、がんゲノム医療への期待や課題、海外の動向を紹介しました。

あいさつ

正しい知識で治療

公益財団法人ＳＧＨ財団理事長
ＳＧホールディングス株式会社
代表取締役会長
佐川急便株式会社会長
栗和田　榮一 氏

当財団のがん研究振興事業は、平成元年の「佐川がん研究助成振興財団」設立により始まりました。市民の方々にがんへの理解と最新医療を学んでいただく啓発活動として、市民公開講座を年１回開催しています。財団設立当時は不治の病といわれていたがんは、日進月歩で進化する医療により、治る時代へと変わっています。正しい知識を得ることで、がんを必要以上に恐れることはなくなります。本日の講座を通して、多様化するがん治療の知識を深めていただきたいと思います。

基調講演

「がんゲノム医療とは？」

京都大学医学部
腫瘍薬物治療学教授　武藤　学 氏

遺伝子異常に効果薬剤

臨床試験のデータに基づき、平均的な患者さんに一番よい治療、すなわち標準治療を行うのが従来型の医療です。これに対し精密医療とは、個人個人の遺伝子（ゲノム）、環境、生活習慣など多様性を考慮して治療や予防を施す新しい取り組みです。がんゲノム医療もその一つで、がんの原因となる遺伝子異常に対して効果の期待できる薬剤を使い、治療成績を上げていこうとするものです。

分子標的薬剤の開発が進み、次世代シークエンサーの登場でゲノム解析も向上しています。昨年6月には遺伝子パネル検査が保険適用になり、全国11か所の「がんゲノム医療中核拠点病院」とその連携病院、「がんゲノム医療拠点病院」で検査を受けられるようになりました。関西では京都大学と大阪大学が中核拠点病院です。

ただ、保険診療で対象となるのは、標準治療がない、もしくは標準治療が終了された患者さんになります。そのため病状の悪化で治療につなげられないことも多く、治療に繋がる割合は10―15％程度が現状です。はじめから検査をすれば、ゲノム検査で合う治療が見つかった患者さんは状態のよいまま治療がうけられますし、ゲノム検査で合う治療が見つからなくても、まだ標準治療があると希望をつなぐことができます。ゲノム検査で治療につながる変異が見つかるとは限らないこと、治療薬が保険適用外の場合は高額の自費負担になるという点は、今後、市民の方と考えていく必要があると思います。

エビデンスのある治療を提供するためには、データの蓄積が不可欠です。日本では、がん遺伝子パネル検査を行うだけでなく、全てのゲノムデータと臨床データを国立がん研究センターが設置している「がんゲノム情報管理センター」に集めています。この取り組みに関しては日本が進んでおり、今後、日本のデータを基に世界の患者さんの治療に役立つデータが生み出される可能性があります。

講　演

「がんゲノム医療の世界的動向」

情報管理 日本が先進

池田　貞勝 氏
東京医科歯科大学医学部附属病院
腫瘍センター准教授

がんゲノム医療にいち早く国を挙げて取り組んできたアメリカでは、2017年にがん遺伝子パネル検査を使う単体治療ですが、ほとんどのがんは平均して4～5個が遺伝子変異をしていることが分かってきました。アメリカでは昨年、複数の薬剤を組み合わせて複数遺伝子変異を標的とする試験が行われ、高い奏効率を得ています。複数の変異を一度に治療することによって、がんを倒す。そんな時代が来るのではないかと期待されています。

がんゲノム医療にいち早く国を挙げて取り組んできたアメリカでは、2017年にがん遺伝子パネル検査ができるようになり、治療法の開発も進んでいます。現在の治療の主流は、一つの変異遺伝子に一つの薬剤

「がんゲノム医療における遺伝性腫瘍」

発症臓器 特定できる

小杉　眞司 氏
京都大学大学院医学研究科
医療倫理学・遺伝医療学教授

遺伝子の変異かによって、どういう臓器にがんが起こりやすいかが分かっています。がんになりやすい体質だとわかることに不安を感じる方もおられるでしょうが、家族の健康管理に役立つ情報が見つかる、予防や治療に結びつけられる場合が非常に多いということが重要です。

主な遺伝性腫瘍として、遺伝性乳がん・卵巣がん、大腸がんを中心に発症してくるリンチ症候群があります。高い頻度でがんが発生する臓器にフォーカスを当て、きちんと検診を受けることで早期発見・治療に確実に結びつけられます。遺伝性腫瘍の可能性がある場合には、主治医が行う説明に認定遺伝カウンセラーが同席します。その人に合った説明をし、不安に対してご家族を含め継続的なサポートを行っていきますので、安心して相談してほしいと思います。

治療を目的に行ったがん遺伝子パネル検査で、遺伝性腫瘍が見つかる場合があります。遺伝性腫瘍とは、生殖細胞系列に生まれつきの変異があり、それが発がんの最初の引き金になっているというものです。どの

「膵（すい）がん・希少がん患者の希望に繋（つな）がるゲノム医療」

「5年生存率」が向上

眞島　喜幸 氏
特定非営利活動法人パンキャンジャパン理事長、一般社団法人日本希少がん患者会ネットワーク理事長

がんゲノム医療が進んでいるアメリカでは、膵がん患者も遺伝子パネル検査を受け、遺伝子変異にマッチした治療を受けられるようになっています。FDA（米食品医薬品局）で承認された分子標的薬、臨床試験、適応外薬の使用という三つの治療の選択肢があり、この40年間一桁だった5年生存率が、今年になって10％に上がっています。我々の間でも、希少がんの患者さんを含め、がんゲノム医療への期待が高まっています。ただ、標準医療の中で使える薬が2剤というのは日本もアメリカも同じなのですが、日本は膵がんの臨床試験が非常に少なく、適応外薬も使えない現状があります。

膵がんの研究予算はアメリカが年間170億であるのに対し、日本では1・5億円。これを何とかしなければいけないと思います。日本でもゲノム医療が始まって成果も出始めているものの、体制は整備できていないので先生方も患者さんも苦しんでいます。厚生労働省にもっと頑張っていただけるよう、我々もまだまだ活動を続けていかなければいけないと思っています。

閉会のあいさつ

今後、医療の王道に

平岡　眞寛 氏　日本赤十字社和歌山医療センター院長

現在のがん医療で最も進んだ医療である標準治療は、平均的な医療でもあります。そうした医療を突破する大きな力となるのが、がんゲノム医療です。人の顔がそれぞれ異なるように、がんにも個性があります。遺伝子情報を解析してがんの個性を理解し、それに合わせた精密医療を行っていくことが、今後のがん医療の王道の一つになります。皆様にもそう共感していただけたかと思います。大きなパラダイムシフトを起こすには、なお多くの課題があり、一つ一つ解決していかなければなりません。そのためには市民の皆様の力が必要です。本日はありがとうございました。

パネルディスカッション　会場からの質問と回答

司会＝武藤学氏
パネリスト＝池田貞勝氏、小杉眞司氏、眞島喜幸氏

――初診からがんゲノム医療が実施できるのはいつになりそうですか。

池田　早期にがん遺伝子パネル検査を行うことが本当に奏功するのか、アメリカで今、臨床試験が行われています。既に肺がんでは遺伝子変異を調べた個別化治療が行われていますので、科学的根拠が出てくれば、様々ながんで、まず遺伝子変異を調べていく流れになっていくと予想されます。

――遺伝子異常が家族性の場合、自身や子ども、孫の医療保険に影響は。

小杉　日本の医療保険、生命保険では、家族の病気について書く欄はなく、生命保険協会も、そうした情報は使わないと宣言しています。

――アメリカはがんゲノム医療の財源をどう確保しているのですか。

池田　大抵は保険会社が払っており、その分、保険料はかなり高額です。最先端の医療を受けることができる反面、社会全体を見ると医療費が高額になっていることが社会問題になっています。

眞島　パネル検査はゲノム医療の入り口に当たるので、政府には出口まで見た医療全体について費用対効果を考えていただきたい。膵がんに関してはゲノム医療の方がはるかに費用対効果がいいという結果がアメリカで出ており、これが論文になれば共有していただけるのかなと思います。

武藤　がんゲノム医療をもっと良くするためには、治療をやり尽くした後に検査するより、最初にやった方がいいのではないかと、市民の皆さんが声を大にしてほしい。我々が言うより、やはり市民の声が非常に大きいのです。そのためには制度設計が必要ですけれども、一人一人の治療を良くするというポリシーで我々も頑張っていきます。本日はいろいろな立場の講師の方から話が聞けて、非常にためになったと思います。ぜひご家族や職場でも話し合い、社会と皆さんと政府と医療機関の中で、いいものができればと期待しています。

SGHがん研究助成

がんの基礎及び臨床における優れた研究を対象として、若手研究者の育成を目的に、平成元年度から助成を行っています。

応募資格

日本の大学、研究機関、医療機関等において、がんに関する基礎研究または臨床研究に携わる日本人研究者及び医療従事者、ならびに日本に定住する外国人研究者及び医療従事者（個人またはグループ）。ただし、2020年4月1日現在満45歳未満とする。

【助成金額】1件 100万円／15件　【期間】1年間

第31回SGHがん研究助成金授与式にて、代表でスピーチする大口裕人氏

第32回 SGHがん研究助成
第2回 SGHがん看護研究助成

《昨年から助成スタート》

6月30日（火）まで受付

※応募方法などの詳細はSGH財団ホームページをご覧ください。

【問い合わせ先】公益財団法人SGH財団事務局
TEL:075-255-9310（平日9時～17時）
https://www.sgh-foundation.or.jp/

公益財団法人SGH財団は、国際的で活力ある社会の創造に向け、多面的かつ幅広く社会活動に寄与することを目的として、教育・文化、医療・福祉、経済・産業等の振興・発展を図るための研究及び事業への助成等を行っています。

SGHがん看護研究助成

がん看護に関する優れた研究並びに臨床における探索的な実践開発を対象として、看護実践の発展に寄与することを目的に、令和元年度から助成を行っています。

応募資格

日本の大学、医療機関、研究機関等において、がん看護に携わる日本人研究者及び医療従事者、並びに日本に定住する外国人研究者及び医療従事者（個人またはグループ）

【助成部門】研究部門／新規性・独創性があり、臨床的意義のあるがん看護に関する研究
実践部門／臨床における探索的な実践開発

【助成金額】研究部門・実践部門　1件 50万円／12件　【期間】1年間

第1回SGHがん看護研究助成金授与式で、栗和田榮一理事長から代表して授与証を受け取る青木美和氏